

直木三十五全集

20

江苏工业学院图书馆
續中
藏書章

小説集

示人社

直木三十五全集第20卷

平成三年七月六日発行

編纂協力 直木三十五全集刊行会

発行者 宗 野 信 彦

発行人 示 人 社
東京都文京区水道一―九―一
株式会社

郵便番号 一―二―二

電話 東京三八二二―二四一三

印刷 モリモト印刷株式会社

製本 イワサキ・ミツル

装幀

落丁・乱丁本はお取替致します

本文及び口絵写真は改造社版直木三十五全集
第20巻（昭和10年8月19日発行）を用いた。

第二十卷目次

君不見此義民傳	三
金毛織數奇事件	三八
武道流轉	七五
戸越村傷害事件	一〇〇
相馬大作事件	一一八
御場段切れ異變	一二五
義經の立場	一八三
明智光秀會見記	二〇一
べんけい	二〇五
川中島	二二二
伊賀の水月	二三三
水野の武士道	二三五

續中短篇小說集

君不見此義民傳

一 揆自慢

「それ來う」

赤い襪一つ、栗色の肌に、いゝ骨組を現はして、一人の壯者が、形ばかりの土俵の上で、四股を踏んだ。

すぐ、間近い、八大龍王の社の、神さびてゐる森の中には、篝火の影と、人のどよめきと、笛や、小鼓の音が、立ちこめてゐて、村は秋祭りであつた。

「一丁」

掌に、唾を、汚ならしいほど、はきかけて、薄暗い所から、一人の若者が草叢を飛び出す蟲のやうに、躍りかゝつた。

「へちやなす、來う」

「この、ひねぼつくり」

作法もなく、形もなく、ぶつつかる所が勝負。肩をはたく手、襪を掴む手、跳ねる足、歪む顔。

それを、取巻いてゐる若い人々、その若者の間々に、娘や、子供や、老人達が、若者と同じやうに、

「丑公、負けるな」

とか、

「喜い公、やれ、このこつて牛」

とか——さうした角力場の造られてゐる廣い庭。畑とは小川に區切られてゐて、左右には小作人の長屋、牛小屋、馬小屋。土俵の正面に、障子を取り外して、緋の手氈を一枚敷いて、親類、縁者、村の重なる人々と、酒をくんでゐる長瀬長左衛門。

村の人々は、縁側へまで居流れてゐて、長左衛門の機嫌をとつたり、角力を見たり、そして、女中の運ぶ酒に、

（吞めるだけ呑んで）

と、誰一人辭退せずに、

「おつとつと、鼻缺よ、一杯行かう」

「ふう、うまい酒やで」

もう膝を崩しながら、あばた面の人々や、鼻のない人がおもしろく酔うてゐた。

「若、出なんしよ」

と、婆が怒鳴つた。その聲に人々が、聲のした方を振り向くと、長左衛門の息子の長作が、人々の後方に立つて、微笑んでゐた。土俵の周囲から、座敷からも、

「若、一寸出た」

「出た」

「今日、無禮講やで、出んと、若でも、おら引つ張り出すで」

「出た、く」

二、三人が、長作を押出した。今一人を投出して、土俵の上に、しやがんでゐた若者が、

「坊に出られちや、豆取れんがな」

と、叫んだ。

「外の豆取れやう」

と、いつた時、長作が、

「爲か」

土俵に上つて、

「さ、来う——どつからなりと、どしんと来う」

上背も、形もちがつてゐた。爲は、頭を伏せて、食ひ下つたが、

「うんとしよ」

と、長作が叫ぶと、そのまゝ、押切られてしまつた。

「さ、次や、若に勝てるまでやれ」

一人は、座敷で、半分立上つて、さげんだ。

「二丁」

一人が、ぶつつかつたが、小手を振られて、すぐ、土俵を割つてしまつた。

「お才に見せてえ」

と、一人が呟くと、

「叱つ——親旦那の耳へ入つたら、何うするで」

二

「いやあ、代々、庄屋の家柄ぢや、強い——強いのが、當り前ぢや」

と、一人が、膝をぐらつかせながら、長左衛門を見ると一人が、

「當り前ぢや」

と、合槌を打つて、

「何んせ前田の犬千代ちぶ、日本一の豪の大將が、持て餘しよつたんぢやからのう」

「あの時は、えらい事ぢやつた」

一人は、肩を脱いで、

「おらが、この疵は——皆の衆憶えとるか、丹生坂の戦の時によ——」

「又、出た、嘉助、よう憶えとるぞ」

「憶えとるか」

「憶えとる」

「どうか」

嘉助は、太刀疵を、ぼんと叩いて、肌を入れた。

越前の門徒が一揆を起して、織田信長に反抗した時、この若狭の人々も、宗門大事の一念と、戦國時代の氣荒さから

「信長が何んぢや」

と、叫んで「進めば極樂、退けば地獄」と、四半の布に二行に大書した旗を押立てて、竹槍、手槍、ぼろ鎧で、押出した。信じてゐぬ宗教の下に死を覺悟してゐるこれらの

百姓は、戦の法と、槍の術も知らなかつたが、たゞその決死の心一つで、前田の精兵を相手に、半月も、一月も、一進一退した。

「侍だの、何んだのと、何ぬかす。それでも侍け」

と、罵つて、野の中に積上げられて、薪をのせられてゐる戦死者に回向をする僧のつゝましい姿を見、線香の匂ひを嗅いで、

（この戦で死にや、極樂往生疑ひなしちふもんぢや）

と、死者を羨ましがつて、翌日の戦には、また競つて進んだ。

「丹生坂の時によ、のう、旦那——旦那が、前田の大將、横山治左衛門尉と、とつ組合ひぢや。ごろ／＼、ごろ／＼」

俺ら手のつけやうが無うて、はら／＼しとると、佛の加護は有るもんぢや、横山めの、兜が脱げてよ。そこへ、この旦那が、どかんと、己の頭をぶちつけて、この頭が石頭でよ、村角力の頭突で、こち／＼になつとる石頭を、横

山の豆腐頭へ、どかん——ふら／＼／＼」

その男は、半分立ち上つて、眩暈して、倒れる眞似をしながら、

「とう／＼横山め、首をとられて——」

長左衛門が、

「その代り、長い間、憎まれたぞ」

「若坊が、これ又、石頭の岩頭、かん／＼頭、鐵頭。のう

長坊」

庭の長作へ怒鳴つたが、五人抜きをした長作の姿は、も

う、そこには無かつた。

「それで、今でも、三定三村といや、役人共めも、ぶるぶ

ると震へ上つとる。皆、旦那の御蔭ぢやて——さ、一杯——

御蔭に、あやかつて一杯」

一人はふうつと、酒臭い息をして、

「もう、おら」

と、手を振つた。

「て、手前一揆の戦ひの時に、兵米方で、ふるへてゐやが

つて——」

「そ、そら、お前だ、何いひくさる」

長左衛門が、

「こら」

と、怒鳴つた。

「昔の話やめ、御時勢ぢや、百姓は百姓、武家は武家。つ

まらん、昔の自慢話をしとると、憎まれるぞ。昔は、強い

もん勝ちで、何もかも、めちや／＼やつたが、天下様（秀吉

吉のこと）が、定めなされてからは、有難い世の中ぢや——

何の、かのと、すぐ手を出して、自慢したがるがいかな

ぞ。島津様や、長曾我部様でも、一も二もなく兜を脱がし

やる時勢ぢや、百姓は、百姓らしく、米、豆を作つとりや

え、喧嘩沙汰たらん」

人々は、頭を下げて、

「全／＼——そ、その通り」

老人が、

「世の中は、昔よりよくなつた。昔は、戦ふと、家財を

すて、逃げたものぢや。田も畑も、戻つてくると、これ返

し、踏み返してあるし、畑の物も、田の物も、食へるもん

は、何一つ残つたらずに、雀や、鳥までをらんやうになつ

た。元龜、天正のころにやあ、この村が、七十戸あつたが

天文になると、二十戸にへつた。それが、今百戸餘りにな

つたんぢやから、天下様の御蔭ぢや。いつまでも、一揆の

話で、腕自慢しよる時勢でないぞ。武士にやかなはん。お

いらは百姓ぢやで、百姓らしうせにやいかん」
長左衛門が、

「よう聞いとけ」

と、いつた。人々が、頷いた。

刀狩り

一

「長左、在宅か」

一人の土が、三人の足輕を連れて入つてきた。廣い土間や、左側の勝手元に、立ちながら、食事をしたり、話をしたりしてゐた召使や、小作人等が、周章で、食事をよし、立上つて、頭を下げた。

「はい、はい」

「居るか」

「いえ、旦那様あ、お参りに——」

長作が、奥から出てきて、小腰をかゞめながら、
「手前、この家の作でございますが、御用の趣きは？」

と、板の間の下座へ手をついて、

「お褥」

と、命じ、

「さ、何うぞ、お上り下されまするやうに、さ」

武士は、四邊を見廻してから、

「藏は？」

「はつ、藏？」

「藏ぢや」

「はい、藏は、裏庭にござりまする」

一人の足輕に、合圖すると、足輕が、

「藏へ案内せい」

と、いつて、庭へ出かけた。

「座敷へ、案内してもらひたい」

「はい」

武士の様子に、解せぬ所があつたが、長作が案内して行

くと、廊下傳ひに行きつゝ、

「この部屋を開けい」

「はい、母の部屋でございます」

開けると、老婆が一人、縫物をしてゐた。

「おや」

と、御辭儀するのへ目もくれないが、部屋の中を見廻して、

「御邪魔 仕つた」

次の部屋も、次の間も、そして、その奥へ入ると、すぐ床の間の刀懸けや懸けてある大小へ、眼をとめて、

「その腰の物を持つて、上り口へ参れ。外に刀はないか」

「はい」

「土蔵の中にあらう」

「はい」

「置すことならぬぞ、今度、天下より、町人、百姓共の所持致す、刀、槍、刀子の類を、ことごとく召上げい、と刀狩の御布令が出た、そのため、調べに参つたのぢや、上り口へ、持つて参れ——藏には、何れ程仕舞ふとるか」

「さあ——」

と、首を傾けつゝ、

「この刀は、先祖代々——」

「左様の事聞いてはをらぬ。一揆の發頭人並のこの家として、刀槍の類は、うんとあるはずぢや。案内せい」

と、いひつゝ、武士は、先に立つて、上り口へ出て行つた。

二

暗い土蔵の中——二階の窓から入る光線が、ほのかに差込んでゐるだけで、冷たさと陰鬱の中に、物持、つゞら、調度の類、棚の上はいろ／＼の箱が一面に、並んでゐた。その奥の方、何も見えぬ位暗い所に、一束にして麻縄で縛つて、立てかけてある槍、刀、その中に混つて、二挺の舊い鐵砲。足輕が提灯をつけて、案内してきた小者に、

「運べ」

「何をでがす」

「それぢや」

小作人は、刀の束へ手をかけたが、

「こりや一人では運べんぞい」

「肩へ擔がせてやるから、うつむけ」

「肩へだつて——」

「黙れ」

どんと、胸を突かれて、ふくれつ面をしながら、足輕の

前へしやがむと、足輕は、二、三十本も一束にした刀の束を、百姓の肩へのせた。よろめきつゝ立上つて進んで行く百姓、さうした刀の束が二つ、槍が十三本、鐵砲二挺。數を調べ、結び目へ封印して、足輕達は主家へ戻つてきた。

長作は、蒼い顔をしながら、自分の膝と、土の膝との間にある家賣の刀を、ぢつとみつめてゐたし、土も興奮してゐるらし、足輕が入つて行くと、鋭い眼を向けて、

「これだけか」

「いや、藏の中にて、封印して參りました」

と、掌へ、心憶えに書いた刀、槍の類をよんで、

「これと合せて、總數でございます」

「かやうな武器を、匿しよつて、これぢやから、刀狩が行はれる。いつ何時、お上に不平ぢやとか、坊主が何んぢやとか申して暴れんものでもない」

長作が、

「そりや、古い、昔の話でございませう」

「何が昔？——何が古い？」

土は、長作を睨みつけて、

「左様に申すおのれは何んぢや。上より出た刀狩の御布令

にとやかく申して——」

「とやかく申しませぬが、この刀は——」

「刀に差別があらうか？ 一旦はことごとく、上へ引上げて、その上事情があらば、改めて下げ渡すと申すのが、何

故解せん」

「いや、下げ渡すと申してをられて、刀、武器、武具の類の限り、手許へ戻つたゝしめがないで——」

「うぬは、おれを、盜賊と申すか」

「いや」

「お上を、かたりと申すのか」

土は、片膝を立てた。召使ひの一人が、

「もし」

と土に呼びかけて、

「決して左様な」

足輕が、黙つて、手を延して、その老人の胸を突いた、

「若、謝んなされ——若」

長作は、怒りにふるへながら、うつむいてゐたが、誰か何んといつても、頭を上げなかつた。

「その刀、持つて戻れ」

「土は二本の名刀と一束の刀とを足輕に持たせて、戻つてしまつた。」

「畜生め」

長作は、屑を噛んで、涙をためてゐた。

御堂建立

一

村の主な百姓達が爐邊や、縁側や、上り口の板の間やに集つて、

「今年や、豆は悪かんべえ、土臺、蟲が、何んでかう出るんぢやろ」

とか、

「米も、この天氣まんでは、よう無いぞ」

とか、いつてゐた。

「不作の上に、くそ垂れが、刀狩やなんぞと、ぬかしよつて、刀や、槍を皆取り上げくさつて、こゝの、刀も、返して來よらへんぢふからの」

「土に刀は、猫に鯉節ちや、何返すもんか、さうぢやろ、家來がよい刀持つとると、殿様が、見せてみい。見せるとそのまゝもう、決して返しつゝ無えちふから、こゝの刀だつて——」

「丸で、泥棒ちやの」

「さうよ、人が汗水流して作つたものを、勝手に召上げてそれからしてが、泥棒ちや」

「所で、今日は、何んぢやろ」

そんな話を、人々がしてゐる時に、襖が開くと、吉崎御坊の役僧と、長左衛門とが、現はれた。人々が、膝をかくし、脚を坐り直すつと、

「さ、こちらへ詰めてもらはふかな、皆の衆、もつとこちらへ」

と、長左衛門がいつた。

「何うぞ」

「さ、御先に」

人々は、譲り合ひながら、つましく二人の方へ、膝を集めた。そして、俯向いてゐると、

「皆の衆、御承知のやうに、吉崎御坊の御影堂が、日蓮坊

主に焼かれたまゝで、勿體ないことぢやが、御祖師様の御姿は、本堂で、阿彌陀と一緒にゐなさる。それで、是非、御堂を再建せにやならんが、何分、戦つゝきが、やう／＼に治まつたところで、御坊でも、われ／＼のことをよう御察し下されて、延ばし／＼してござつたが、もう戦がなくなつてから五年、今年ならと、皆の衆に何分の寄進を申込みなされたのぢや。畑物がよいなし、天氣まんで、米もどうやらと思ふが、あれだけの一揆を起して、さん／＼手向ひしたのに、何の咎めもなく、今日かりして生きてをれるのは、皆、上人様の御蔭ぢやで、その事をよう思うて一つ、奮發してもらひたい。この中には、戦事とは申しながら、士を殺した人もあるし、父を殺され、子を殺された人々もあるし、御影堂へ寄進するなら、さういふ業障はすぐに消えるであらうから、出来るだけの事はしてもらひたいと、こゝにおはす御坊の役僧蓮光様よりも、わしよりも改めて御願ひ申します」

二人は、百姓達に頭を下げた。百姓も、それに答へて、丁寧に頭を下げた。

二

その夜、松造の所へ、七、八人の百姓が集つてきた。一人が、

「何んぞ嘆願しても、刀は戻してくれんさうぢや」

「さりやのう」

と、城下へ嘆願に行つた一人が、

「天下様が、大の刀好きで、何人でも、よい刀なら錢金に飽かして、御求めなさる氣ぢやで、刀の相場が、うんと上つた。それでよ——刀狩ちふのは名ばかりで、あん中から、えゝ刀を選出すのが、目當の仕事ぢやて、専ら評判ぢや」

「さうあらうの」

「所で、それは、それとして、庄屋が、おれらの預かり物の刀を、へいさよですかと、上へ渡したんは何ういふもんぢや」

「それが、このあひだ話に出たが、長左殿がをられなんで長作坊一人で、いくら申立てゝも通らなんださうぢやで」

「しかし、預かつた以上、預かつたいふ責任はあるぢやろ

が、自分とこの刀の事はかり申立てゝ——」

「はゝゝ、おいらの刀は、棒切れ同然ぢやで——」

「棒切れにしたつて、おいらの大切な一腰、萬一の時にはよ——」

「それよりや、今度の、御堂の寄進、庄屋どんが、銀二十枚は、少なすぎるぞな。庄屋どんが、銀二十枚なら、おいらは、青錢一差しでよからうでないか」

「いや、近頃、何かについて、昔の長左衛門殿では無うなつたわい。いやに、お上へへい／＼申して、昔一揆の頭に立つて、槍をもつて暴れた面影は、何處にも無うなつて、まるで、近頃は、お上の手先ぢや」

「御時勢がちがうて來たと、申しとられるが、何うちがふたか、とんと解せん」

「さうぢや」

「かう見えても、いつ戦が起らんものでもなし——」

「それより、もう、税の取立てが近づいとるが、領主様が新らしいで、何ういふ事になるやら、わしら、これが何よりの心配ぢやが、長左衛門殿は、この邊も、とんと、上から聞いとられんし、知らん／＼と、仰しやるが、あれだけ

上へ胡麻溜つとつて、そんな手加減くらゐ、嗅ぎ出せんやうでは、仕方が無いでう」

「税か——おれも、来る／＼とはおもつたが、——さうだの。不作の上に、かう重なつとつては——」

「御影堂の事は、何がさておいても、すてとかれん。そこで、割り當ちやが、銀二十枚の外を、わしらへ割當るとなると、今年や、落つて、御坊詣もでけんやうになる。それで、庄屋どんに、三十枚ちふことに、願うてみたら——え」

一人が、人々の顔を見廻した。

「助かるのう」

「こんな願ひは、始めてだから、長左衛門殿も否とはいへまいし——」

「刀のこともあるし」

「さうよ、それで、おれ達、村の名代となつて一つ話してみやうと申すのぢやが、どうかの」

「これだけでか」

「さうよ」

「われ、話すか」

「そりや——せんでねえが」

「われがしてくれりや、話してもよかるで」

「村の衆は、皆同意か」

「話すりや、否とは申すまい、助かることぢやでの」

「ぢや、村人家に話して、名代さんに、行つてくれといや、行くとして——長作が、ちよい／＼金を使つとるで、無い事も、無いらしいだよ」

「お辻にか」

「さうよ。知らんのは、庄屋殿だけぢやろ」

「お辻の阿魔にや、侍があるといふでねえか」

「さうだつて」

「ぢや、坊は欺されとるんか」

「土に惚れとりや、坊が欺されとるんぢやし、坊に惚れとりや、侍が欺されとるんぢや。中々、凄えもんで、二人を手玉にとつとるちふが、早う嫁を抱かさんから、こんな事になりよる」

「然し、嫁も少うなつたの」

「この頃、ちよい／＼嫁印がをるが、何んせ、いつ戦が始まるか知れんちうて、皆、奉公に出しよつて、一時、村に

や、娘の影はなかつたからのう」

「何處の奴とも知れん足輕に、えらい目に逢ふから——」

「あの時分の事を思ふやうなつたが、あは／＼、税のこと考へたり、寄進の金のことを考へると、出したうないて、人間、慾張り、得手勝手に出来上つとるもんぢや、あは／＼」

「誰しも、入りやすいが、出したうはない、太閤秀吉でん下でさへ、おいらの刀を召上げなざるんぢや、下民の慾張りは、當り前ちふものぢや」

「その通り、／＼、咽喉元すぐれば、熱さ忘れるで——」

「然し、もう一度、一揆起して、莫旗立て／＼よ。離去穢士、欣求淨士の差物で、よい土に見えたぞよ」

「切合うて、土には負けんからのう」

「力がちがふ、角力なら、十番に十番が、勝つぢやろ」

人々は、夜の更けるまで、かういふことを話してゐた。昔のことが、いつまでも、残つてゐた。

豆一分増し